

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520154

研究課題名(和文) 大学教養教育におけるESDとしての地域活性化ワークショップの展開

研究課題名(英文) The Perspective of the Regional Vitalization of workshop as ESD in the Cultural Education of University

研究代表者

加藤 修 (Kato, Osamu)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：20302515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、地域活性化ワークショップを大学の授業として取り入れ、学生に継続的な活動環境を確保することで、主体的に思考する機会と実践経験量を増やすことができた。それにより彼らは自己理解と他者理解、技術能力の向上とともに高い問題意識を持つように変化した。

さらに2年目からの商店街との協働による実践的課題との対峙、多世代間との交流によって、多角的思考力を身につけた。大学と地域の連携のあり方についても、両者にとってリアルな知識・文化・情報の接触領域として、街なかの「スタジオ」を創設し、その運営を継続している。

研究成果の概要(英文)：In this project, I tried to take the regional vitalization workshop to the class of university and introduce the opportunity of self-thinking and the amount of practice experiences. So the students were secure the environment of continuous activity in this research.

Thereby, they changed so that it might have a high awareness of the issues with self-understanding, others understanding, and improvement in technologic abilities. From the 2nd year, multilateral thinking power was put on by confrontation of the practical subject by collaboration with an association INAGE shopping street, and a wide range of contacts regardless of age. For both, as a contact domain of realistic knowledge, culture, and information, the "studio" in a town is founded and the management is continued also about the state of cooperation of a university and the area.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術一般

キーワード：芸術 文化政策 ESD ワークショップ 地域活性化 アートプロジェクト アート 地域連携

1. 研究開始当初の背景

千葉大学は総合大学として各種専門領域に所属する学生が在学するが、授業として、互いが連携し活動する環境の確保は充分にはされておらず、2007年、普遍教育教養展開科目として「アートをつくる」を立ち上げ、その有効性を図るべく、授業内でコミュニケーションを高めるアートワークショップを開発し、各種施設・地域で連携活動を始めた。受講学生は、教育学部、工学部、文学部、看護学部など様々であったが、彼らは各自の専門領域を生かしながら互いに連携し実践的課題を消化したが、その経験の蓄積が、コミュニケーション力・問題解決力の向上につながることを確信した。より具体的な研究課題と向き合うために、継続的活動の場として、新たな「地域」を見いだす必要が生まれた。

本研究で企画するアートプロジェクト・ワークショップは、人が守るべき価値観を社会に問いかけるものだが、アンケートによると、ワークショップつまり「つくる」作業を通し、参加者は意識変化し、企画側の問題提起を正確に捉え、各自が内容の発信力を増している。また同時に、ワークショップを繰り返し運営する学生自身にも変化が見られた。

各地から集まる学生が、この研究活動で培った知識技術を、将来の居住地で展開するならば、現在、多くの社会が抱える人と人の結びつきの弱さ、コミュニケーション力の低下、深刻なコミュニティ崩壊に対しても、予防または対策につながるものと考え。特にこの3年間における研究初期においては、社会的には東日本大震災が起き、人災である原発事故とも重なり、様々な観点における価値観の見直しが迫られた時期と重なる。

2. 研究の目的

現在、地域社会では経済危機とともに地縁が失われることでコミュニティの崩壊が進行している。長年研究してきた創作活動を通しての自己および他者理解、またそれをさらに展開させた個々人をつなぐワークショップ活動は、現代の孤立した人々を結びつける機能を果たすことが期待される。そこでこの研究では、地域活性化ワークショップを大学の授業として取り入れることで、学生のコミュニケーション能力開発の手法としての提案を行うこと、世代間連携を生み出し持続可能な社会への意識の萌芽を促すこと、

大学と地域の新しい連携のあり方を見いだすことの3点を目的とする。

3. 研究の方法

本研究の方法は、授業の中でどのようなワークショップが実施可能かを実践的に研究すること、ワークショップ活動を通じたコミュニケーション能力開発の検証、ワークショップでは、参加者間におけるコミュニティ形成が期待されるが、学生間、住民間または双方の変容を、アンケート調査、インタビューにより行う世代間の連携形成についての検証の4点に関して、その効果を検証する。

また、平成24年度以降はデータに基づきプログラムの改良を行う。

からまでの研究の観点は、複合的に重なるが、その研究基盤となるのが「アートをつくる」である。「アートをつくる」はI~IVでできており、1年目の前期・後期がと、2年目の前期・後期がとである。内容は、が企画制作および演習、は現場での実践、は活動内に自己の研究課題を見だし、発展的に企画し実践する学生に開いている。の履修学生およびTAは、授業を長期スパンで体験した貴重な視点の持ち主である。

4. 研究成果

本研究は、教養科目「アートをつくる」を基盤とすることで、安定的な活動環境を整え、社会との持続的・発展的な協働の構造を組み立てることができた。そして学生の主体性・実践力の高まりを、成果として段階的に確認していくことが可能となった。

「アートをつくる」では、企画制作および実践を行うが、学生はそれぞれの企画のリーダー、各種役割を分担する。彼らの意識変化は、毎年、制作されるドキュメントによって知ることができる。ドキュメントは、記録機能のほか、学生の活動内での気づき、本音を知る貴重な資料でもある。とくに「1年を振り返って」では、彼ら自身が自己分析した文章となっている。ESDの観点からのデータとして、有効な記録とした。

(1) 「アートをつくる」の授業の方向性

2011年度(2011.4~2012.3)

学生という立場の彼らがどのように社会に提言していけるか、という課題に取り組んだ。人が人として何を大切にすべきかを考え、プロジェクトとして企画化し実践した。折しも、3.11という自然災害およびそれが引き金となった人災が起きた年度であり、授業は演習の感覚でなく、極めて切迫した現実的課題と対峙する場となり、実践的に活動した。

<受講学生>

「アートをつくる」/ 18人

<実施したワークショップタイトル>

「記憶の美浜、そしていま 未来」

「会話の地層」

「旗をつくる-住みたい国を考える」2回

「等身大からはじめよう」

「患者さんとつくる」「色彩で対話しよう」

2012年度(2012.4~2013.3)

大学生本人たちが社会を構成する一要素であることを自覚し、大学から2km圏内の小商店街において協働し始めた。「街おこし」を行う団体と連携したこともあり連携はスムーズで、活動内容は飛躍の広がりを見せた。「地域」つまり地盤を伴うつながりや、コミュニティに触れる、さらに責任量の多い活動においては、他者理解や地域における信頼獲得など、相応の時間を要する。

<受講学生>

「アートをつくる」/ 22人

「アートをつくる」/ 1人

<実施したワークショップタイトル>

「旗をつくる-住みたい国を考える」[2回]

「等身大からはじめよう」

「患者さんとつくる」

「オリジナルTシャツづくり」

2013年度(2013.4~2014.3)

大学生たちが主体となって活動できる固有スペースを、地域社会の環境内に確保した。1年前からスタートした地域商店街との協働の中で互いに信頼感を構築できた結果でもある。大学からの発信と社会からの要求を感知しやすいリアルタイムな空間としての運営を開始した。街中のスタジオを各自がどのように捉え、それぞれの専門的知識技術をどのように活用し継続運営するかは、彼らの生きぬく力でもある。学生自身が、自身の専門分野の研究意義や課題をあらためて把握する機会となれば、スタジオの存在は具体的で多角的な教材となる。

<受講学生>

「アートをつくる」/ 23人

「アートをつくる」/ 1人

<実施したワークショップタイトル>

「旗をつくる-住みたい国を考える」

「患者さんとつくる」「発光する記憶たち」

「花を描く」「オリジナルTシャツづくり」

<実施したアートプロジェクトタイトル>

「アートフェスタ/シャッターペイント」

「アートフェスタ/市民がつくる旗」

「稲毛オープンスタジオをつくる」

(2) ESDの観点からみた、学生個人の活動に見られる授業効果事例

福島県、千葉県の小中学生を対象とした合同キャンプの実施

(2011TA MC1 三宅 中)

2011年7月、2009年度に「アートをつくる」の授業として参加した「久留里野外美術展」で協働したアーティストから、福島県の小中学生を対象とした1週間の避難キャンプの実践に向けた協力依頼が届いた。小規模ではあるが自分に今できることと考え、当TAを伴い、現地においてWS「等身大からはじめよう」「旗をつくる」を行った。当初、参加者年齢に対して内容が難しいか心配したが、原発事故の問題、今後の課題などに関しても児童たちは明確な問題意識を持っていることが分かった。義務教育における現行の図工、美術の授業課題設定の質や方向性に対する違和感を、学生とともに強く実感した。

TAは1週間のキャンプを終え大学に戻ると早々に、「アートをつくる」の前年度受講学生にも声をかけ、福島県と千葉県の小中学生を対象とした年末1週間の合同キャンプ実施に向け、教育学部学生を中心とする実行委員会を立ち上げた。もともと理論を中心とする領域の大学院生であったが、実践活動の重要性を実感し、修了までにその後2回の合同キャンプを実施した。(参加小学生 [福島10名・千葉10名]・大学生スタッフ20名)

稲毛区地域活性化支援事業助成獲得

学生代表(2013学部3年 八里 大介)

「アートをつくる」を通年()で受講することで、自己の研究領域における地域連携の重要性を知り、3年以降のゼミ決定、研究の具体化に際し、「地域協働」の現場を研究の場とした。本人は「アートをつくる」を受講し、連続2年間携わることで、さらに問題意識を高め、単に地域協働参加から、地域活性化における学生と地域の関係性を真剣に考えるに至った。空き店舗を利用したスタジオ創設には、稲毛区地域活性化事業助成金の獲得が必須であったが、工学部3年の当学生は学生代表となりプレゼンを担当した。授業内でのプレゼン演習経験が多く発表は質が高く、本人にとっても実践の機会となった。内容は、当グループの活動方針とこれまでの活動実績、スタジオを用いた活動予定である。その後、物件のリノベーション、オープニングセレモニー、各種活動の継続展開があげられるが、学生間のネットワークも用いながら積極的に活動展開されている。

造形教育の研究・普及の場としてのスタジオ運営(2014 DC1 伊東 一誉)

学部生時代から通算すると在学8年目となる当絵画ゼミ学生は、入学年度より、本アートプロジェクトの変遷を直視し、記憶し続けた存在である。本年度より、東京学芸大学連合大学院の博士課程にも合格し研究を開始した。昨年度より、自主研究として創設したスタジオ(稲毛オープンスタジオ)において地域小学生・大人を対象とした造形体験教室を運営している。後輩にあたる学部・修士課程の絵画ゼミ学生は、シフトを組んでサポートし、知識技術の伝達にとどまらない価値観の伝達作業を展開している。

造形教育研究の場としてのスタジオを提案実施(2012TA MC1 丸橋 千秋)

2012年度、「アートをつくる」TAとして、地域小学校におけるアートプロジェクトにおいても、学生リーダーとして肌理の細かい計画と実践をした当学生が、2013年度、在学中ながら公立中学校の非常勤教員となった。教育現場では、以前より暖めていたワークショップを展開し、学校内の特別活動や地域連携活動等においても成果を上げた。

2013年末には、勤務先教員有志をスタジオに集め、美術教育をテーマとした研修会を開催した。非常勤教員の立場の本人が、常勤教員を集め自己の考えを論ずることは、勤務地も人と人が関係性を積極的に構築する場と捉えているからで、ガラス張りの街なかのスタジオにおいて、普段、社会からは見えづらい教育現場の教員の実像を、学生本人も含め社会に周知する機会とした。

(3)継続展開するワークショップ実績

本研究では、特に実践回数が多く、また対象条件を様々にしながら、ワークショップの能力と可能性を精査ができた点から、ワークショップ「旗をつくる-住みたい国を考える」100人ワークショップ-等身大からはじめ

よう」「患者さんをつくる・ランプシェード」を紹介する。

以下にあげるワークショップ(以降 WS と表記する)は、教養科目「アートをつくる」を授業展開する以前から始めたものも含む長期継続している内容である。企画の継続によって問題点が浮かびあがり改善を繰り返すが、それは改めてそのワークショップの優位点を確認する機会でもあり、企画は完成形となる。明確な価値観を掲げることで、その価値を共有する団体との協働の機会を得ることで、活動範囲を加速的に広げ、その目的に近づけることができる。

WS「旗をつくる・住みたい国を考える」

世界の旗の共通性や相違を比較しながら、それぞれの国民が色彩に思いを込めていることを確認した後、どのような国に住みたいかを参加者一人ひとりに考えてもらい、その国に合った国旗を制作する。ここでは、色の塗り方や配色などは問題視せず、作業を通して、各自に考えを整理させることを優先させ、制作後、全参加者に発表してもらう。

<年度ごとの地域・対象者と参加者数>

2011

- ・高原夏のアトリエ/長野県
[対象]福島県小学生 8名
- ・千葉県立美術館
[対象]千葉県小学生から大人まで 50名
- ・mirai キャンプ・多摩市
[対象]福島県・千葉県小学生 20名

2012

- ・成田市立公津の杜小学校
[対象]千葉県小学4年生 108名一斉制作
- ・前橋市図画工作実技研修会
[対象]群馬県小学校教員 16名

2013

- ・夜灯アートフェスタ・稲毛
制作場所：稲毛オープンスタジオ、稲毛小学校、高齢者施設、当日の野外会場
[対象]稲毛市民 167名

WS「100人ワークショップ

等身大からはじめよう」

年度ごとに社会的課題と関連させたテーマを掲げ、千葉県内全域の中学生を対象に上限100名として募集をかけ取り組ませる超大型の木組みによるオブジェ作りである。

「等身大からはじめよう」は、すでに2006年から各所で実施してきた内容だが、2010年からは美術館を会場に連続実施している。県立美術館の優位点を最大に活かすとともに、現在、教育界においても課題となる、コミュニケーション力の向上、協力意識の萌芽、生活上必要となる基本動作などの伝承を目的に、広大な芝生の外庭にて多人数で実施している。まず複数の参加中学校生徒をシャッフルしてグループ編成し、各自が活動上、コミュニケーションをとらざるを得ない状況を作り出す。また、材料には一人では扱えないサイズの枝も含め、彼らのモチベーションが高まれば互いに協力しあい、巨大なオブジェの制作も可

能にしている。

3年間継続することにより、参加者は確実に増した。それは毎年の完成作品や制作過程の写真パネル展示により、引率教員が参加の意義と活動の安全性を正しく判断できた結果と言える。コンパクトにまとめる授業だけでは、生徒は多くの可能性を逃し、現代、もっとも必要な社会的要求に応えられない。

<年度ごとのテーマと参加者数>

2010年テーマ:グループごとに設定させる・65人、2011年テーマ「基地」:守り次に繋ぐための拠点の象徴とした・46人、2012年テーマ「舟」:協力して次へ踏み出す象徴とした。15m以上の舟を2艘制作し、どこに漕ぎ出すべなのかを考えた・84人(千葉県立美術館)

WS「患者さんをつくる」

患者さんとともにクリスマスイルミネーションのランプシェードを制作し、大学生が制作した木組みオブジェに飾り付けをする。病院スタッフの理解が深まることで、参加・協力者も増え、作業もスムーズになっている。また、楽しみにしていただけの患者さんやスタッフも確実に増している。(テーマ:2011「関係性」、2012「プレゼント」、2013「架け橋」/千葉大学医学部附属病院)

WS「発光する記憶たち」

シャーレ内に思い出深い小物と、なぜそれが大切なのかを書いたコメント用紙をシャーレ内に入れ麦球で光らせる。本人の記憶にも温かい光を灯すもの。

(2009 久留里野外美術展、2010 登録有形文化財大野屋、2013 稲毛オープンスタジオ)

WS「色彩で対話しましょう」

生きてきた中で、参加者にとって印象的に記憶している色彩をパネルに塗り、自由に色名をつけ、その理由とともに色彩パネル内、右スペースに活字にして配置する。

(2010・2011 国立新美術館)

(4)ワークショップによる意識変化

科学研究費の助成期間中、とくに中心的な役割をしたWS「旗をつくる・住みたい国を考える」の実践前後に行ったアンケート調査から、参加者の意識変化を解析した。また、ファシリテーターとなる大学生は、活動をもっとも間近で繰り返し体験しており、参加者同様の意識変化が予想される。今後自国をどのようにすべきかを、参加者が主体的に思考する機会となることを期待し継続実施した。

下記アンケートデータは、公津の杜小学校4年生(成田市)の回答による。アンケートの質問内容は以下の通りである。

事前アンケート

あなたにとって大切なものは何ですか
あなたが住みたい国はどんな国ですか

事後アンケート

あなたにとって大切なものは何ですか
あなたにとって大切なことは何ですか。
あなたが今、社会に対して気になっていることは何ですか

あなたが住みたい国はどんな国ですか

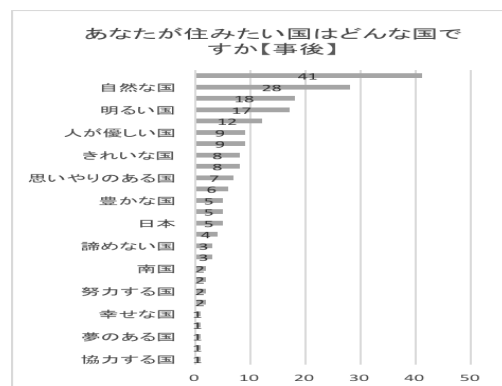
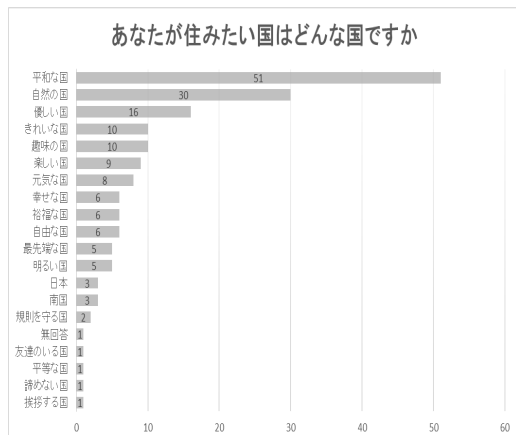
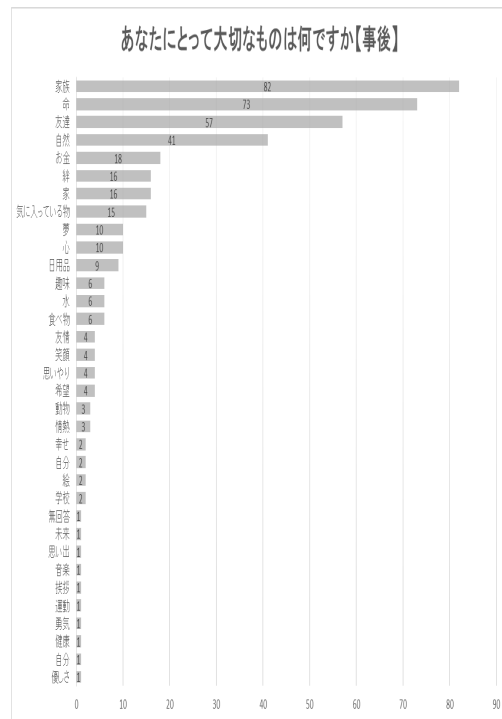
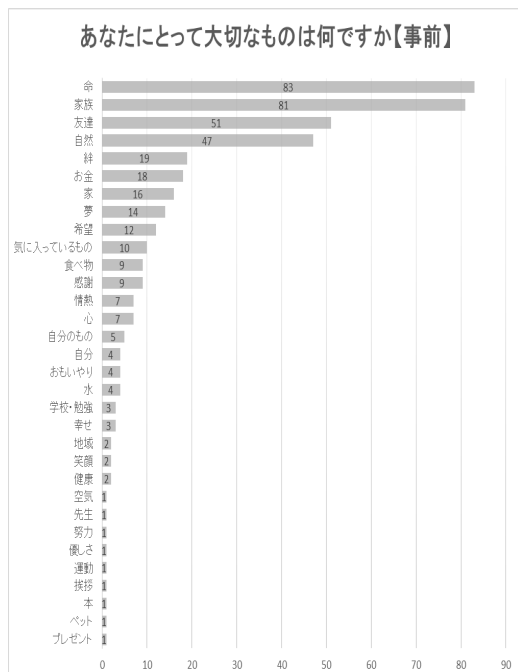
小学校4年生の学童期中盤の子どもたちは、重要他者の範囲を、両親に加え学校の友人や教師へと拡大していく時期であり、学校や家庭の重要他者の態度、言動、その他との経験がその中で自己概念を確立しながら発達をしていく過程内にある。物質的には恵まれ、便利なものがあって当たり前な時代に育ってきた彼らにとって、大切なものは「モノ」なのか「コト」なのか、ワークショップの経験により、イメージは具体性を増すのか否かなど、彼らの考え方、物の見かたの変化を確認するとともに、ワークショップの効果・可能性も検証しようとした。

<事前アンケート結果>

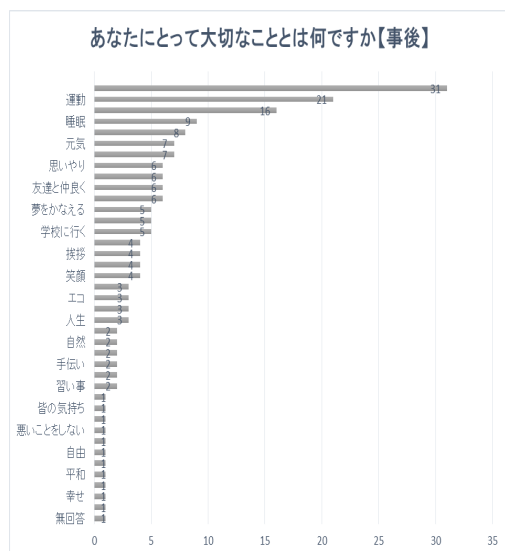
「あなたにとって大切なものは何ですか」という質問に対し、「家族」や「命」など、代わりがないものを挙げる生徒のほかに、「家族」ではなく、日常的に与えられている物質的な存在、例えば「家」同様に「食べ物」や「水」など、生きていくために必要な物質を大切な

ものとして考える生徒もいた。また、お気に入りの玩具や文具、スポーツ用品などというように「日用品」を挙げる生徒もいて、「大切なもの」という感覚に深みや思い入れが少ない児童もいた。また少ないながらも、「感謝」「笑顔」「絆」「思いやり」など、人間関係のつながりを生きていくために大切なことと認識している生徒、「地域」など自分が存在する場所の大切さを認識している生徒とが分かれた。「住みたい国」の質問に関しては、事前のアンケートでは、実際に存在する国名を挙げる生徒もいたり、漠然としたイメージのままワークショップに参加したことが分かる。「平和な国」や「自然な国」という回答の多くは小学校4年生で収集できる情報の中で「戦争」「犯罪」「環境破壊」などというキーワードと共に導き出されていることがアンケート集計の結果で分かった。また既に実在する国を参考にして回答していた生徒が多く、主体性を欠いた「日本のような平和な国」という回答の仕方が目立っていた。

<事後アンケート結果>



上記は、実際に住みたい国を考えながら旗を制作し、ワークショップ終了後に事前アンケートと同様の質問を行った回答結果である。「家族」や「命」という回答は、前後共通して多数を占めるが、事前アンケートにはなかった「友情」と記述した生徒がいた。「友達」という存在だけではなく、互いに助け合い、支えあう関係性を表す言葉がプラスされた。ワークショップ参加前に比べて具体的な内容の回答が目立つようになった。



事後アンケートの は、事前アンケートにはない設問であるが、ワークショップを通して「本当に大切なこと」とは何が見つかることができたのかどうか確認するために集計した。事前アンケートの「大切なもの」に日用品などを挙げていた児童たちからは予想しない回答結果を得ることができた。それは「思いやり」や「友達と仲良く」など、社会における人間関係につながる回答である。ワークショップという切っ掛けを通して、「本当に大切なこと」は必ずしも形あるものではないことに気が付いたと期待したい。

WS「旗をつくる-住みたい国を考える」は、いきいきプラザ稲毛を利用する高齢者にも行った。質問は事前アンケートの2問のみだが、小学生と高齢者の考え方や価値観の違いについても今後調査したい。

(5)ESD の観点からみた地域活性化ワークショップ・アートプロジェクトの課題

社会環境とは、人の関係性をベースとした価値の伝達作業の場ということができるが、地域活性化、つまり地域を構成する市民の意識活性を考える場合、ESD という観点は不可欠な視点と言える。それは、アートワークショップを用いた各種プロジェクトを10年以上企画実践する中で実感し、今回3年間の研究では、活動の継続そのものとそこから生まれる効果の調査・確認が軸となる。しかし、ワークショップを用いたアートプロジェクトによる人の意識変化や関係性の向上を、効果とし

て数値化することは容易ではない。そこで3年間の研究では、プロジェクトの運営上の詳細な記録、実践時の写真の他に、参加学生全員が各自の一年を振り返る文章を含めたドキュメントを毎年度制作することで、その単体または3冊の比較から、学生の意識変化、プロジェクトの洗練化、各年度における社会との切実な関係性(3.11に対する取組みも含む)などを確認できるようにした。今後も活動継続とその記録を恒常化し、3年間で得られた人的・物質的環境を活かしながら、目的を共有する活動団体の連携を促し、より複合的な活動を可能にし拡大する地域環境計画の企画化、またその実現を課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

- 「大学教養講座におけるESDとしての地域連携活動の実践報告」加藤修 査読なし 千葉大学教育学部研究紀要第61巻 (pp495~502) 2012年3月1日発行
- 「ESDとしての地域連携アートプロジェクトの実践報告」加藤修 査読なし 千葉大学教育学部研究紀要第60巻 (pp477~490) 2011年3月1日発行

〔学会発表〕(計 3件)

- 「大学教養講座におけるESDとしての地域連携の実践報告-商店街に拠点を置いた活動」加藤修 査読なし 第52回大学美術教育学会 (京都2013.10.13・ポスター発表)
- 「ESDとしての地域連携アートプロジェクト2011の実践報告」加藤修 査読なし 第51回大学美術教育学会 (大分2012.10.20,21・ポスター展示)
- 「ESDとしての地域連携アートプロジェクトの実践報告」加藤修 査読なし 第50回大学美術教育学会 (宮城2011.9.24・ポスター発表)

〔図書〕(計 3件)

- 加藤修 CHIPS DOCUMENT 2013(2014.3.7) p64
- 加藤修 CHIPS DOCUMENT 2012(2013.3.7)p64
- 加藤修 CHIPS DOCUMENT 2011 (2012.3.7)p64

〔その他〕

- 報道関連
 - テレビ・ラジオ
 - NHK「ひるまえホット」11/20 11:05~12
 - 特集：稲毛アートフェスタ・シャッターイベントについて/千葉ケーブルテレビ/BayFM 新聞
 - 朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日経新聞、千葉日報
- 雑誌記事
 - MANAGEMENT SQUARE2014 1月号(芳林社)
 - ホームページ

<http://www.neochips.net/openstudio/>

6. 研究組織

- (1)研究代表者
 - 加藤 修 (KATO OSAMU)
 - 千葉大学・教育学部・教授
 - 研究者番号：20302515